

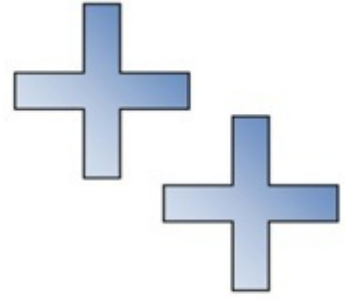
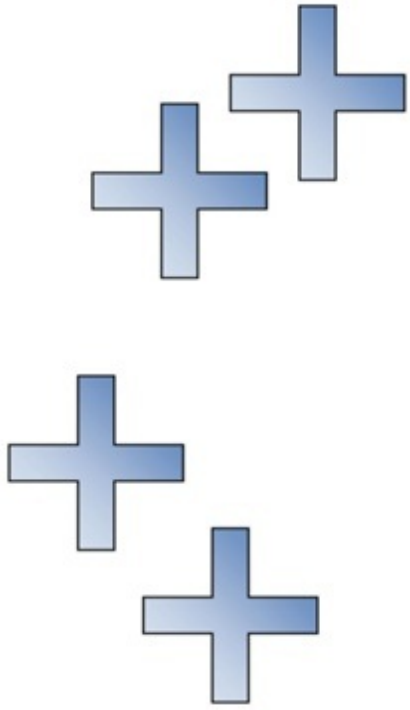
創



星

vol, 14





創星

14





CONTENTS

創星

2016,10 vol,14



青色の扉	あき	三
秘密 [上]	詠人不知	四
ある日ミドルを	馬場貴生	七
詩	ぼえまる	十二
夜空の映画放談	夜空	十五
麒麟星座	松田定幸	二十一
現在修行中俳句	天沼太郎	二十二
140文字 リレー小説	ぼえまる	二十六
「狭間」特別版4-2	甲斐聖子	二十八
タンカトイラスト	松田定幸	三十三
クラシック音楽・教養のお時間	天沼太郎	三十七
さむいね	間々えいよ	三十九
ミシオネール	一路真実	四十二
Philosophy of Stardustbooks		五十
編集後記		五十一



☆表紙・目次デザイン 間々えいよ

『青色の扉』

あき

扉に触れる君の手元を見ながら、僕は返事をした。

「先生も知っているってことだよ。」

屋上に続く扉の前、薄暗い階段の踊り場で僕等は話をする。扉には鍵がかかっている、屋上に出ることができないからだ。僕等は授業をさぼっては、この場所を訪れる。互いに相手が来ていたら話をするというだけで、会う約束をしているわけではなかったし、二人で話す機会があるからといって、それほど親

密な仲でもない。僕は、君の名前だって知らないのだから。

君は僕から視線を外し、君の、左の手首に巻かれている包帯を撫でる。僕は、その包帯の下がどうなっているかを知らない。聞く必要もない。ただの捻挫の可能性だけである。

「この扉、いつも鍵がかかっている。」

君は屋上と僕等を隔てている扉に右手で触れた。その表情は、どこか悲しそうだ。

「そうだね。」

僕は君の悲しげな横顔を見つめ続ける。屋上の、青色の扉は開かないままだ。

秘密「上」

よみびと しらす
詠人 不知

【松田】

松田とは、ひよんな事からつるむようになった。

大柄で見た目は悪役商会のような風貌、そのわりに繊細で優しく気が利き、女だったら嫁さんにするにはもってこいの男だった。

三十代働き盛りだが、食べ盛りでもあり、必ず一食で二飯二合は軽く平らげていた。

松田が同じ部署に転勤してきてから、気がつけば仲良くなり、その見た目とのギャップ、妻のような気配りに小生はひかれていった。

「松田、来月の会議の事んだけどよ」

「その件なら先方に連絡済みです。場所もおさえてあります。」

「さすが、松田だな。もう押さえてあるのか。サンキュー。」

「いいえ、お任せください。」

仕事の事はもちろん、車の修理や、引っ越しの手伝い、美味しいレストラン情報など、プライベートの事も松田は気がきいていた。

「ほんと、松田が女なら俺の嫁さんにしてたよ。でも俺も松田も結婚してるから愛人って事でいいか？(笑)」

そんな冗談がいつしか小生の口癖になっていった。

小生が引っ越した先は、鬼中という町で、最近購入した松田の新築の自宅とも近くなった。

休日になると、松田はよく奥さんの夏実を連れて遊びに来た。

夏実は、もうすぐ三十代、ぼっちゃりして愛想もよく、家に遊びに来る度に、小生の一歳になる愛娘と遊びながら、半ば松田に催促するかのようになっていた。

「子どもはかわいいですよね。うちも早く欲しいな。」

【夏実】

「いらっしやいませ。」

夏実は今日も元気な声で接客をしていた。

学生の頃から、アパレル関係でアルバイトをしていて、松田

と結婚した後も、契約社員としてアパレルで働いていた。

お店は、「321」という三十代〜四十代をターゲットにしたレディースブランドで、夏実の接客の良さから、常連客も多かった。

ほら、またいつもの常連さんだ。

「夏実ちゃん、なんかかわいい新作入ってきてるう〜？」

【川上】

長い黒髪をサラッと片方に振るかのように首を傾けると、川上は今日も九時四十五分に出社してきた。

「おはようございますう〜。」

軽い挨拶をした後でデスクに着くと、PCを軽快に叩き出した。

うちの会社の事務パートになって、もう何年になるだろうか。

お局様とまではいかないが、彼女も古株に入る。四十代、子どもは中学生になった一児の母らしいが、そんな風にも見えず、女の色気を漂わしている。

「今川さん、こないだの伝票、上がってますので確認よろしくですう〜。」

【今川】

今川は松田が転勤してきた後に入社したキャリア新人だった。短髪のスポーツマンタイプで、小生や松田と同世代、同じプロジェクトチームになった事がきっかけで、よく三人でつるむ事も多かった。

今川は鬼中の隣町、新正のマンションに住んでいて、今川車が故障した時に、松田が朝の出社時に今川を迎えに行っていた。

二人共、始業の一時前前の朝七時半には会社に出社していた。

「松田、今日も迎えありがとうな。さあ〜頑張りますか〜。」

【小生】

出張から直帰した小生は、松田に連絡した。

「もしもし、松田、ちょっとお願いしたいんだけど、今日帰りに俺のデスクにある資料を持って来てくれないか？」

「わかりました。では、帰りにご自宅にお届けしますね。」

松田は決まって十九時には退社していた。それから小生の家に寄るとすれば遅くとも二十時には来るだろう。

そう思ってたっていたが、二十一時になっても松田が来ない。

「おかしいな。」

そう思いながら待っていると、二十一時四十五分にチャイムが鳴った。

インターホンのモニターを見ると、松田が立っていた。

「松田、今日遅かったな。何かあったのか？」

「いいえ、遅くなってすみません。実は最近、退社した後、健康の為に鬼中海岸でウォーキングしてまして。」

鬼中海岸とは、小生や松田が住んでいる鬼中という町にある海岸で、松田曰く、夜は人気もなく静かで、町の灯りもきれいでウォーキングするにはもってこいの場所らしい。

松田はいつからか帰りにこの鬼中海岸に寄っては、一〜二時間ウォーキングをしているらしい。

「そう言われれば、少し痩せたか？」

【別居】

朝、八時。いつものように小生が会社の駐車場に着くと、松田のワンボックスが入ってきた。

「あれ、松田、今日はいつもより遅いじゃないか？ 寝坊か？」

「いえ、実は、今、実家から通ってまして。」

聞くと、最近、夏実とうまくいってなくて別居状態だという。

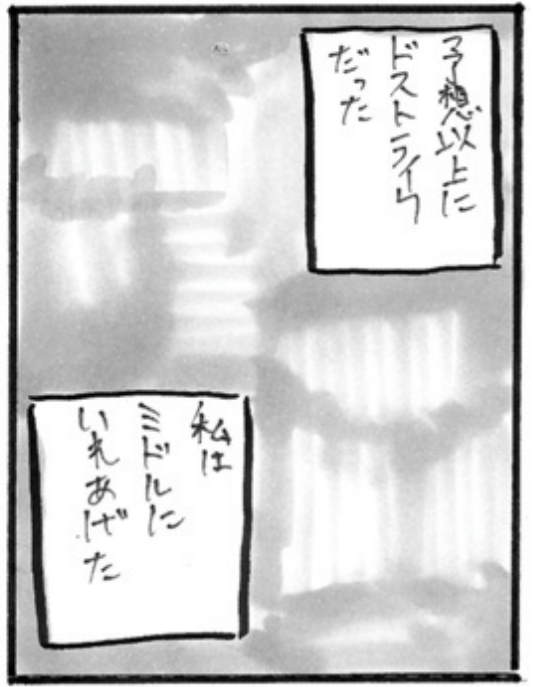
「どうした？ 何かあったんだよ。こないだまで、あんなに仲よかったのに。」

「実は嫁から子どもが欲しいと言われたんですよ。ただ、何でも中途半端で、こないだ犬が欲しいって言って飼ったのに、もう犬の世話ができないとか言ってますし、そんなんで子どもとか無理だろうって言ったら、喧嘩になって泣かれちゃって。大変ですよ。」

まだその時、これが秘密への入口だとは知るよしもなかった。。。









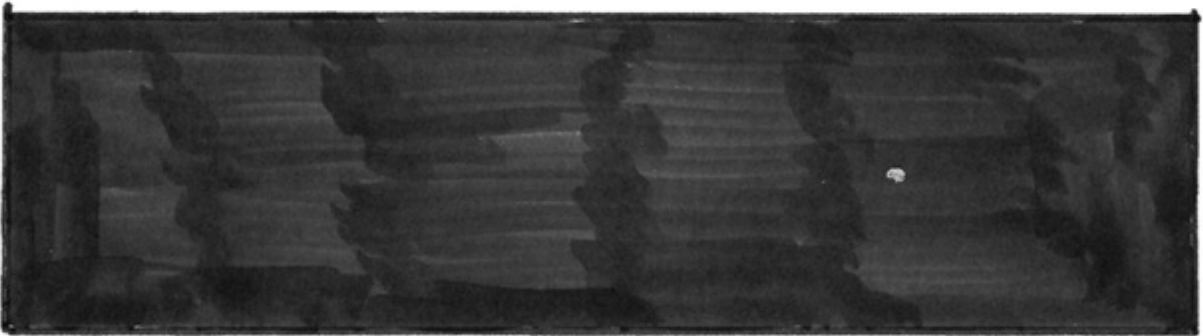
私の
つまらなかつた
毎日が

オコシ
輝きだした



たとえ
会社で
どんな事が
あっても

山家に
ミトくんが
思ふこと
幸せを感じた



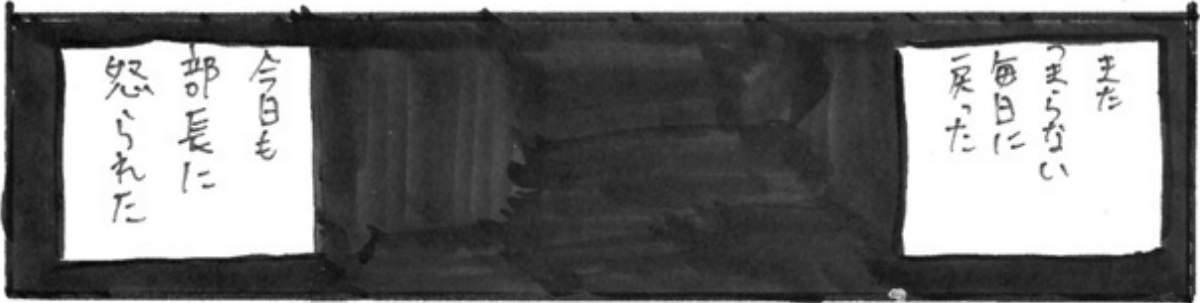
ある日
帰らら
ミトくんは
いなかった

近所のママさんが
彼の怒りに答えて
彼はそちらに
行ってしまった



こんなままなら
彼を汚いままに
してあげばよかった

彼の隠れた
魅力など
私だけのものに
よがったのに……



また
つまらない
毎日に
戻った

今日も
部長に
怒られた



そんな
あつ日……

ジョニーが
捨てられていた
……

完

詩「わたわた曜日、ばたばた月間」 ぽえまる

詩「わたわた曜日、ばたばた月間」

ぼえまる

ああ、いそがしい
わたわた曜日が 駆け足ですぎていくよ
ふと、気がついてみれば
今年も半分以上、すぎました

ああ、目が回りそう
ばたばた月間が
ほら、すぐそこに

ふと、気がついてみれば
今年もこの季節が
無事に
やってきてくれました

毎年、ありがとう
ありがとう

詩「ねつ」

ぼえまる

ぶどう酒に満ち月を浮かべ
月を愛でながら思い出す

太陽の下で
秋風に揺れていた菊の花
そこに今はいない
愛する猫の面影を見た

なんだか
旅へ誘われているような気がして
いわし雲を見る

ああ、私もどこかへ出かけよう
さあ、キミも出かけようか
そう、決心するのだけれども
お寺の鐘の音が遠くから聞こえてきたら
気持ちがゆれてしまうの

夕空の下で別れた貴方に
夢の中で会いましょう、と
強がってみせる

大きなてのひらの貴方と握った手が熱い

まだ、熱い

詩「野外ライブ」

ぼえまる

自然界の衣替えが始まった

赤色

黄色

茶色

きれいに着飾って、どこへ行くの

秋桜に負けまいと

萩の花が咲いている

胸を張って咲いている

月夜のすすき原に舞台ができている

植物や動物たちが集まって

演奏会へのお招きさ

静かに

静かに

虫たちのリズムで

さあ、はじまるよ

衣空の映画放談

第一回

〜世界から猫が消えたなら〜

【あらすじ】(ざっくり、しかもうろ覚え)

主人公の「僕」はある日突然脳腫瘍を患い、余命僅かであることを知る。打ちひしがれて帰宅すると、家には自分と同じ姿形をした死神がいて、「お前は明日死ぬ」と告げる。死神は「僕」の大切な物をこの世から一つ消す代わりに、寿命を一日伸ばしてやると言った。

自分の大切な物がこの世からなくなってしまったら、お、「僕」はたった一日生き延びることを選ぶのか。

(映画のネタバレがあります。ご注意ください)

別の映画を観に劇場へ足を運んだ際、公開予定作品案内でトレイラーの音楽が良く、何となく気に入った作品だった。優先順位は高くはないが、時間とお金に余裕があれば観に行こうか程度に考えていた。

しかしある日ツイッターで、劇中に私が今まで生きてきて観た映画の中で好きな映画トップ10に入るといっても過言ではない「アンダーグラウンド」という作品について語られるシーンがあると知り、優先順位が一気に上がった。

私の好きな映画がどのような語られ方をするのか、この目で確認したいと思い、最終日のレイトショーに何とか滑り込んだ。

劇中取り上げられたユーゴスラヴィア人のエミール・クストリッツァ監督作「アンダーグラウンド」

という映画に出会ったのは一九九八年だった。

思い返せば一九九八年は不思議な年だった。当時私は近所に住んでいたイギリス人のCに英語を教わっていた。Cの家でよく見せてもらったインディペンデントという新聞の紙面を占めていたのはユーゴスラヴィアの Kosovo で起きていた紛争の記事で、紛争がどういいう経緯で起こったのか度々教えてもらった。英語だったから二割も理解できていたかどうか疑わしかったが。

その頃日本はフランスで行われるワールドカップ初出場を前にして色めき立っていた。奇しくも日本はユーゴスラヴィアから独立したばかりの、同じくW杯初出場のクロアチアと予選で同じグループ。そして「東欧のブラジル」と呼ばれたユーゴスラヴィアという国が「ユーゴスラヴィア」という国名で出場した最後のW杯である。

そんな年にCが映画好きの私に、かつて福岡市

天神に存在したUXプラザというレンタルビデオ店を教えてくれた。当時の福岡ではかなり特殊な部類の店で、現在でもDVD自体存在しないようなヨーロッパの映画やインディペンデント系映画を揃えていた。棚は監督、俳優、ジャンル以外に制作国でも分けられていたのを憶えている。

店を訪れる度に私の目を惹いたビデオの背表紙があった。ヨーロッパの国別の棚に並んでいて、なぜか「ダ」の一文字だけ鏡文字になっている「アンダーグラウンド」という映画である。いつか借りようと思っているうちにこのビデオ屋はなくなり、時代はビデオからDVDへと変わり、観る機会を失ったまま十年近くが過ぎた。

時は過ぎて、二〇〇七年に音楽がきっかけで出会った友人Hが、偶然に映画も好きな人だった。Hと音楽や映画の話をしていた時に、偶々観る機会を逸したまま十年近く過ぎた「アンダーグラウ

ンド」の名が話題に上った。

その頃私はユーゴスラヴィアのサッカー史からすっかりユーゴスラヴィアマニアになっていたが、「アンダーグラウンド」がユーゴスラヴィアの映画であるとはほとんど意識しておらず、ハンガリーかチェコの映画だと間違っただけで記憶してはいない。

Hとの会話と、ユーゴスラヴィアの歴史に関する映画であると知ってから、「アンダーグラウンド」熱が再燃した。ビデオはすでに廃れ、DVDは廃版だったが、某動画サイトにアップしてあり、初めて見たときは、内容よりも「ようやく観られた」という感動が大きかった。

というのも、ユーゴスラヴィアの複雑な歴史を描いているのでストーリーをしっかりと追おうとすると非常に分かり難いのである。それに加えて劇中で鳴らされるジプシーブラスと呼ばれるハイテ

ンションなブラスバンド中心の音楽に、クラッカ―同然に鳴らされる銃声、戦争の爆撃音の迫力で、ストーリーがなかなか頭に入っていない。そんな映画だから、恐らく誰が観ても「いい」と感じる映画ではないかもしれない。映画を観て感動したり泣いたりしたい人には向かないだろう。しかしフィーリングが合うと何度繰り返し観ても飽きないのだ。

それからと言うものの、「アンダーグラウンド」はリマスターされ、全国の映画館で再上映された。DVDも再発され、毎年行われる「爆音映画祭」でも上映された。最近では監督のエミール・クストリツツアの作品を特集した映画祭も全国の映画館で行われ、スクリーンで「アンダーグラウンド」を観られるチャンスがあれば最低一度は足を運ぶようにしている。

話はかわって最近、家の近所におしゃれな古本

屋がオープンした。複数のスタッフさんが担当の棚を持ち、それぞれ好きな本を並べて販売するという、ユニークなスタイルの古本屋である。

興味をもって偶々行った日に、女性スタッフのKさんがいた。その時には特に深い会話をすることもなく店を出たが、帰宅して店のフェイスブックのページから偶然Kさんと思しき人物を発見し、軽い気持ちで覗いてみたところ、卒業して以来滅多に会うことのない母校の先輩だったことにまず驚いた。それよりも私の目を引いたのは投稿の幾つかに私がよく行く映画館の画像があり、更に遡ると数年前に開催された爆音映画祭で「アンダーグラウンド」を観たという投稿を見つけたのである。もしかしたら同じ時に同じ場所で同じ映画を観ていたかもしれないのだ。

次にお店に行った時に、自他ともに認めるコミュ障の私が迷わず「アンダーグラウンド」お好き

ですかと尋ねた。それからクストリツツア映画の話で盛り上がり、以来親しくさせてもらっている。調子に乗って「創星」をお店に置かせてくださいとお願いしたところ、二つ返事で設置してください。今回こそは何か書こうと思ったのは、設置をお願いした手前、自分が幽霊会員なのはまずいだろうと思ったこともある。

映画だけではなく、音楽でも本でもそうだが、内容も然ることながら、その作品に纏わる思い出によって、自分にとっての作品の価値が上がるということは往々にしてある。「アンダーグラウンド」は作品自体もちろん素晴らしいが、私にとってはそれだけではなく、一九九八年から長い年月を経て、様々な思い出と繋がれている重要な作品なのだ。

そんな作品が劇中で取り上げられた「世界から

猫が消えたなら」

余命宣告された主人公「僕」は非常に映画が好きで、大学時代にできた映画好きのタツヤという友達がいる。大学の構内で映画雑誌を読んでいたタツヤに「僕」が声をかけたのが仲良くなったきっかけだった。タツヤは「僕」に観るべき映画を選びDVDを貸すのが自分の役目だと思っていて、「映画は無限にあるから、このやり取りも永遠だ」と信じて疑わない。多くの人が自分や身近な人間が、明日にも死んでしまう可能性など本気で考えてはいない。映画は無限に近いほど存在するかもしれないが、人間の命はいつだって有限だ。

余命一日になった「僕」はタツヤに「死ぬ前に観るべき映画を選んで欲しい」と頼むが、タツヤは何も知らずに「選ぶ前に自分が死んでしまう」と答える。「僕」が事情を話すと、タツヤは自分が働くレンタルDVDショップの棚を一心不乱に漁

り始めるが、自分の親友が死んでしまうのに「最後に観るべき映画が見つからない」と涙ながらに言った。それが「選べない」という意味なのか、「選べたけどそこにはない」という意味なのかは、タツヤにしか分からない。

そして「僕」は一日だけ生き長らえ、この世から映画は消えた。タツヤの働くレンタルDVD屋は本屋になり、タツヤはその店で働いていたが、映画が存在しないことで「僕」はタツヤと親しくなるきっかけがなかったのだろう、「僕」はタツヤだと分かってても、タツヤは「僕」を誰だか知らなかった。

もしも自分の命が明日までだとして、死神が現れ「一日だけ命を伸ばしてやるから、大切な物を一つこの世から消す」と言ったら、私はたった一日生き長らえるために、大切な映画や音楽や小説

を差し出せるだろうか、泣きながらDVDを探
すタツヤと共に号泣しながら考えた。この後の映
画の展開がどうなろうと、私には殆ど関係なかつ
た。音楽や映画がこの世から消えた上に、最初か
ら存在しなかったことになる。それをきっかけに
親しくなった人たちとの繋がりが初めからなかつ
たことになってしまふなら、たった一日命が延び
たところで何になるのだろうか。

一日生き延びても別れを言う人は誰もいない。
それで時間が余っても、最期の瞬間まで音楽を聴
いたり映画を観たり本を読んだりすることもでき
ない。そんな一日が私にとって価値があるのだら
うか。

作品その物は観る物を感動させようとするのが
鼻についたり、描き方に雑さが目立ったりして、
満点とは言い難い。濱田岳は地味なオタクだが友

達思いのタツヤを好演していたが、宮崎あおいは
「怒り」の方がはまり役だったと思う。

しかし何かに熱中しながら日々生きる人、なく
てもそれなりに生きていけるけれど、簡単に命と
引き換えにできるかどうか考えると悩んでしまふ
ような何かを持つ人は、一度は観てもいいかもし
れない。私はこの手の日本のさわやか感動系映画
は大いに苦手なので一度だけで十分だったけれど、
誰かにとっては、この作品が私にとっての「アン
ダーグラウンド」のような作品になるかもしれな
い。

（衣空の映画放談は今後不定期で続くかもしれま
せん）



— Camelopardalis —

現在修行中俳句

天沼太郎

八月

新豆腐今日のチャルメラ小気味良く
酒のつま名前に惹かれて新豆腐
生身魂されど家督はまだやれぬ
生身魂伸びゆく孫といつまでも
鳳仙花涼風(すずかぜ)教ゆ使いなり
鳳仙花弾ける種を待つ子ども

空に散る花火悲しき絵巻かな
天の川見下ろす我は宙にいて
花火咲く遁走(フーガ)となつて大団円
幾万の星の呼び声天の川
鳳仙花早く実よなれ弾け飛べ
おちよぼ口葉の陰こっそり鳳仙花

灼熱の地球外(そと)から旱星
烈光のずしりと重し赤茄子
そこかしこ自由研究トマトなる

つやつやと君の目映る赤茄子
田舎より届いたトマト皮硬し
髪洗ふ日々の疲れよもろともに
静寂に髪洗ふ音吸い込まれ

九月

なぎ倒しすくい巻き上げ野分かな
葛の花。バゴダの脇で背比べ
空高く匂い立ち上がるさんま焼

空に散る花火悲しき絵巻かな
天の川見下ろす我は宙にいて
花火咲く遁走(フーガ)となつて大団円
幾万の星の呼び声天の川
鳳仙花早く実よなれ弾け飛び
おちよぼ口葉の陰こっそり鳳仙花

かなかなと一声千里を吹き抜ける
虫時雨百家争鳴雌何処
満面に湖湛(たた)えて桔梗かな
鈴背負い吟遊詩人明日はどこ
きりぎりす長脚折りて独奏中

十月

道草は金木犀の香る道

秋の暮これからゆつくり物思ふ

マタギ宿茸づくしの夕ご飯

花いずこ金木犀の誘いに

金木犀瓶詰めにして香(か)楽しめる

ただ一騎にらみきかせて烏瓜

天高しどこまで伸びるやハーブの芽

うり坊の縞薄れゆく烏瓜

烏瓜山一面をキャンバスに

天高し星の天幕引き上げる

あの方は彼方で暮らす秋高

五分の露生の揺籃(ようらん)渦となる

発火点梶井の檸檬(れもん)葛の花

頂(いただき)に火花の王冠葛の花

露昇華魂天で星となる

火花散る天へ一途(いちず)の葛の花

露時雨消える音楽木霊かな

口々に凍る音楽葛の花

大脱走一位に続け小鳥来る
落第生Vの字崩して小鳥来る
新米の声につられて寿司屋かな
新米の札によきによきと精米店
新生の甘さ愛しき今年米

十一月

句を詠まん御苑に展ぶる菊まぶし
整列の大菊屋形に物思ふ
やせ腕に五百と咲きし菊重し
どんぐりのころころころにわか雨
清らかに大輪の仲肥後の菊

十二月

五分分聖菓くるくる切り分ける
○・ヘンリーに寄す
行き違いサンタクロース賢者たち
密やかに聖歌優しくたちこめる
晴れ姿聖樹めかして飾りたて
天掴むネオンの聖樹星を背に

140文字 リレー小説 ～その1～

ぼえまる

※ 以下の物語は友人 N さんとの合作です。

少し前まで戦いがあった。都市をめぐる人間と魔物の戦い。ここは郊外の家の中。ふと誰かに、呼ばれたような気がして外へ出ようとドアを開けた。あまり冷たさを感じない風が、開け放ったドアから部屋の中に入ってくる。風は部屋の中を蹂躞するとあきらかな意思を持ち、私の行く手を邪魔した。

都市で死に絶え、空気の塊に成り果てた風も、郊外では生命力に満ち満ちている。ようやく整頓が終わった部屋を、綺麗に模様替えしやがって、と心の中で毒づきながら、ニヤニヤ笑いの風を見据える。...どついたるか。こんないけ好かないヤツでも、調伏すれば用心棒代わりになるだろうし。

ささやきが聞こえる。「風は気まぐれ」と。

ふと、(調伏の仕方を覚えているだろうか) と不安になる。今ごろ、どうしろというのだ。すでに戦いは過去となりつつあった。

一瞬、風が止まる。霧もでてきて怪しい雰囲気だ。目の錯覚か？ 霧は巨大な狼の姿をしていた。また、風が動き始めた。

布石は打った。ヤツの囁きは対話の始まりで、術の起動と同義なのだから。「精霊の使役には、調伏か或いは...」言葉少なな師の教え。未完成こそ可能性、が信条の人だが、今なら真意がわかる。

「...交渉開始だ」

私は不敵に笑い、つぶやく。

これは後世、風来の風遣いと称された、ある若者の冒険譚。

140文字 リレー小説 ～その2～

ぼえまる

※ 以下の物語は友人 N さんとの合作です。

西暦 3500 年。かの物理学者の宿題とされた、重力波の初観測より数百年後。科学の歩みは、彼の夢が及ばない段階へ至っていた。人間の精神の質量が計測できるようになり、そこに宿る引力と斥力もまた、数値化できるようになった。

そう。ここは、相互の好き嫌いが一目でわかる世界なのだ。

「かったるいなー」と思うが、魔法史の授業中に呟く勇氣はなかった。魔大戦以降、人々は精霊や魔法の存在を否定し、技術と化学で生活してきた。今まで学者の妄想だと言われてきたことが視覚化し、利用されている。そんな世界でも脅威は存在していた。それは悪意を持ったプログラムである。

異変は突然だった。教壇に立つ先生の体が崩れ落ち、室内の生徒達も次々と気を失っていく。

「悪性ぷろぐらむ侵入。浄化開始。コレハげーむデハナイ。繰り返ス、コレハげーむデハナイ」

響く警告音と、機械仕掛けの音声メッセージ。見渡すと、真面目に授業に心寄せていた人は皆倒れ、正気なのは僕だけだった。

さてどうしたものか、と。僕は落ち着いていた。空間がゆがみ、あらゆる物が消えていく。

外へ出た。そして僕は叫んだ。

「なんなんだよ！」

そこにはドラゴンが鎮座し「やあ。いい天気だねえ」と言う。

「知らなかったのかい？ 世界の融合だよ」

空間から数多くのファンタジーが溢れてきた。

第6話 晴れた空

晴れた空は誰もがうかれはしゃぐ空

晴れた空は天気の中で一番の大人気

右の足と左の足で前へ進む
杖でも車椅子でも電車でも
概念として進むべきところ
あなたは持っていますか？

朝でも昼でも夜でもいい

起きた時に空が晴れていたら

昨日とは違うあなたがいてほしい

第7話 手紙

ポスト受けの中に投げ入れた
置き去りにしてきた手紙

「ごめんなさい」

書いているのは違う言葉
私は友達を捨てに来ました
置き去りにしてきた手紙

「さようなら」

本当は罵っている内容で
ポスト受けの中に捨て入れた
置き去りにしてきた手紙

「ばいばいまたね」

なんてどこにもない手紙
帰り道
涙で道を踏み外します
私は道を踏み外しました

第8話 見抜く

山の影からする声が
おまえのあわれをあわれんで
いまかいまかとまっている
仮面を付けた鬼達も
おまえのあわれをあわれんで
いまかいまかとまっている

さあさ、おいでよでておいで
てまねきつけてまっている

影を踏んで腰かけて
森の奥から覗いてる
落した本性拾ったよ
落した本性拾ったよ

山の影からする声が
仮面を付けた鬼達も
影の姿を見つめてる
影の姿を見つめてる

第9話 折りたたむ

その隙間に入れて下さい

折りたたまれたその隙間

わたしは包まれていたいのです

なにかに包まれていたいのです

嘘はゴミ箱に捨てましょう

丸めてゴミ箱に投げ捨てる

わたしは嘘が大嫌いなのです

わたしは嘘が大嫌いなのです

なので

いっそのことわたしを捨てて下さい

折りたたんで丸めてゴミ箱へ

投げて蹴飛ばして捨て入れて

哀れに泣くのは疲れました

第 10 話 鼓膜

耳の奥を突き破る

彼女達の笑い声が

時々胸に刺さります

憧れと尊敬となんでしょう

軽快なリズムは軽さに拍車をかけ

コロコロどこまでも転がって行きそうで

その音がいつまでも耳の奥に残ります

鼓膜をいっそ破壊して

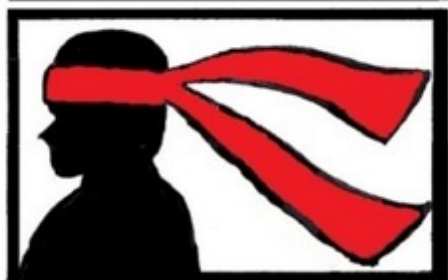
なにも聞こえなくなればいい

そうすれば少しは外へ

少しは外へ出られるのかな

タシカト イラスト

— 行事・歳時記 編 —



松田 定幸



合戦の
いざな
騎馬を誘う
神無月



祭ひの結びで
竜虎相撃つ

如月の

催事の目玉

躍り出て



童^{わらへ}が放つ

阿鼻叫喚



聖夜にて

進物行脚

あんぎや

捌く中

さば

英気を繋ぐ

一服の時

第12回 生きる伝説を聴いて、昔のことを思い出した話

生きる伝説のヴァイオリニスト、イヴリー・ギトリスの演奏を聴いた。御年 94 歳になるそのヴァイオリニストの演奏はあまりに独特すぎた。さすがにテクニックは望むべくもないけれど、「腕が落ちた」などと単純に切り捨てられない何かがあり、若いときの演奏を生で聴けないことを、当たり前ながら残念に思った。

残念に思いつつ、昔演奏を聴いた、ヴァイオリンの名手、ジャン・ジャック＝カントロフのことを思い出した。今回、この話を書きたい。

今回取り上げる演奏会。

A. 2016 年 9 月 11 日(日) 紀尾井ホール

演奏：イヴリー・ギトリス(ヴァイオリン)、ヴァハン・マルディオシアン(ピアノ)

演奏曲：ベートーヴェン/ヴァイオリン・ソナタ第5番「春」

ヒンデミット/ヴァイオリン・ソナタ他

B. 2003 年 ジャン＝ジャック・カントロフ 北九州国際音楽祭、及び 福岡市での演奏会

話戻って、ギトリスの公演について一つ挙げるとするなら、いかにも「木の音」のするヴァイオリンだったことが印象的だった。木の楽器なのだから、木の音がして不思議はないけど、現代楽器の楽器だとずっと金属的な音にする。木の音だからいいとか悪いとか言う話ではない。ただ、古楽器でもないのに、こんな素朴な音を聞けるとは思わなかった。

あともう一つ挙げると、後半に奏された「浜辺の歌」。歌詞を知らずに奏される浜辺の歌は、後半部をアレンジされて、歌詞と全く無関係に展開していく。西洋風にアレンジされた同曲が、まるで別の国の悲歌みたいに響く。着地点を予想できない宙づり状態がなんとも奇妙な時間だった。そういえば、一部「寄する波よ 返す波よ」の部分も延々と変奏されていて、そこは繰り返し変奏されるに似つかわしいけど、ともかく、知っている曲だけにどこに行き着くか分からない演奏を最高の名手の演奏で聴けるというなんとも贅沢な時間だった。

さて、このギトリスの演奏会を聴きながら、もう 10 年以上前に聴いたジャン＝ジャック・カントロフ(ヴァイオリニスト)の演奏会を思い出した。カントロフは、主にフランスで活躍するヴァイオリンの名手である。

カントロフとの出会いは、映画に使われた演奏。昔、「愛を弾く女」という映画があって、そこで使われた曲は、モーリス・ラヴェルのヴァイオリン・ソナタ。古典とジャズの融合する、そして、最終楽章ではピアノとヴァイオリンが全く歩み寄ることなく別々に結末を迎えるという映画の悲しい結末を予想させる大変な曲である。カントロフは、ラヴェルの意図を分かっているのだろう、音楽に浸りきることなく、シニカルに演奏している。

映画のことはさておき、そのカントロフが、福岡にやって来た。

幸いなことに、2 回の公演に行くことができた。一つ目は北九州国際音楽祭、二つ目は福岡銀行大ホールで行われた公演。前者は、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ、チェロも加えたトリプル・ソナタ「幽霊」。後者はベートーヴェンとリヒャルト・シュトラウス、ロベルト・シューマンのヴァイオリ

ン・ソナタであった。

今回の公演はいずれも 2003 年という昔の話。ネットに情報もあまりなく、また、記憶違いがあるかもしれない。そのため、正確な公演曲目など書けないものもある。ご了承ください。

まずは、北九州国際音楽祭の方から。福岡市から、バスと人の車で、北九州市立響ホール まで出かけて行った。これがなんとも残念な演奏会。問題は一点、ヴァイオリンとピアノのバランスの問題。演奏曲のヴァイオリン・ソナタは、ヴァイオリンのピアノで奏される音楽。通常は、ヴァイオリンがメインの旋律を奏で、低音の苦手なヴァイオリンを、上から下までどんな音でも出せるピアノがカバーする。しかし、パンフレットによるとモーツァルトやベートーヴェン時代のだいたい 19 世紀初頭まで、ピアノが主で、ヴァイオリンはその補佐的な役割だったと書いてある。

演奏が始まってみると、たしかにヴァイオリンのカントロフがおとなしい。カントロフといえば、超絶技巧の持ち主で、表現力の豊かなヴァイオリニスト。なのに、ピアノに遠慮してか、メロディーらしいものが聞こえてこない。当然ながらピアノ氏は大張りきりでがんがん音を鳴らしてくる。けれど、そのピアノがどうもいけない。音の強弱のつけ方が極端で、単調な演奏。ピアノの隙間から、いかにも頼りなげなヴァイオリンが聞こえてくる。なんとも残念な演奏会。カントロフ、やる気ないのか？

その数日後、同じペアでの演奏会があった。今度は福岡市のホール。先日の演奏会が上述のごとくだったので、あまり期待せずに出かける。もしかしたら、私もまだクラシック音楽を聴き始めて日が浅かったので、自分には理解できない高級な演奏だったのかもしれない。ならば尚更音楽会に行き、感覚を鍛えねばとホールに出かける。

一曲目は先日と同じベートーヴェンの曲。先日と同じようなピアノの隙間から、やはりかすかに聞こえるヴァイオリンの音をのぞき込むような味気ない演奏。

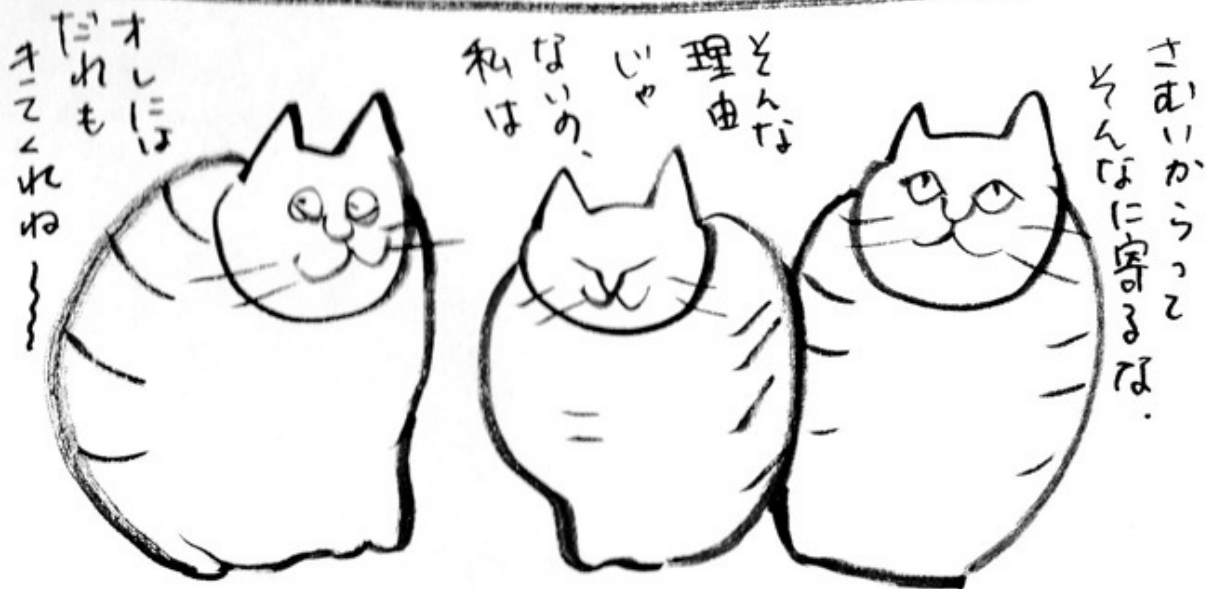
事件は二曲目。リヒャルト・シュトラウスだったかシューマンだったかはっきりしないけど、ほんの一瞬、ヴァイオリンの音が一変した。弱音から始まった音が一気に音量を上げ、ピアノを押しつけて前面に出てきた。眠りそうになっていたところに、強烈な一撃。そこからヴァイオリンとピアノの主客が転倒、ヴァイオリンが素晴らしい歌を歌い始めた。そうになったらもう止まらない。厳格に低音パートを弾くピアノをバックに、ほとんど独演会が始まった。ヴァイオリンが歌う、うねる、ささやく、叫ぶ、黙る、とにかく、ありとあらゆる音が放たれる。ヴァイオリンがこれほど雄弁な楽器であることは、このときカントロフに教えてもらった。演奏者が同じでも、全く違う演奏になることも。

どうして演奏が異なったのかよく分からない。初回が古典派のベートーヴェンで、二回目がロマン派の曲中心というのかもしれない。デュオの相手に気を遣ったのかもしれないし、気まぐれかもしれない。ともあれ、一流演奏家の表現がどれほどのものか実感できた。

最近のカントロフだが、ヴァイオリン演奏を減らして、指揮活動がメインになっている。それが、年齢による(70 歳を過ぎている)技術の衰えによるものなら、残念なことだけど、しかし賢明な選択だと思う。幸いにして、私は素晴らしいカントロフを聴くことができた。その記憶は消えない。一方で、現在素晴らしいヴァイオリン弾きは何人もいる。ムターやツェートマイヤーやファウストなどである。まだ聴いたことのない人もいて、機会があれば演奏会に行くし、興味がある方は是非聴きに出かけて欲しい。

さむいね

まま
えいよ



展示物の気持ち

ま
えいよ

いの中にいれたい
んじよ
そつや
ほげま
やそ
れら
いっ
す



どうせ猫いなり
た
う



あ
え
ら
う
し
い
九博
ご
鳥獣
戯
画
展
ちやうじやう
ま

展示物の
気持ち
ち
そ
二
ん
ば
ん
が
い
た
よ



せ
が
ら
し
か
ー
は
ず
か
し
か
ー



い
じ
う
じ
う
め
て
ん
じ
や
な
ー
め

かぼちゃについて

ま
ま
え
い
よ

ミニッ
パニッ
キニッ
と田んぼで
るな。



ハ
カ
ニ
シ
ン
グ
ス



英語で
かぼちゃを何と
いうでしょう？



全部
食べれるはら
何ともよいの



冬瓜
もそらす
春瓜
なんぞなし



東瓜
はなね



北瓜

南瓜・西瓜はあまのりに

ミシオネール

一路 真実

Ichiro Mami
missionnaire de l'amour



1

夢うつつの状態でも、床を蹴るような足音が響いてくると、ああまたかと自然に思ってしまう。それだけ何度もこういう修羅場に遭遇してきたわけだけど、どうしていつもこうなってしまうのかよくわからない。怒り狂った女が乱れて部屋に踏み込んでくることにも、既視感を覚える程ひどく慣れてしまっていた。ただ愛を分け与えていただけなのに、理解できない人にはどうも伝わらない。

雪が降り積もっていたあの町で、ずっと誰かを待っている夢を見た。ああ、まだ寝ていたいのだ。あのふかふかな雪の上に、顔が冷たくて赤くなるのも気にせず、どさつと前から倒れ込んだように、沈みゆく体を感じながら寝ていたいのだ。

ベッドからゆっくりと上半身を起こすと、隣で寝ていた男は踏み込んできた女に驚き、おろおろとうろたえているところだった。薄い掛け布団がするつと体か

ら落ちると、豊かな乳房がぼろんとあらわになり、女は明らかにそれに目を向けたはずだが、こちらが別に隠そうとしないうでいたら、その態度が余計に怒りをつたように見えた。

「何やってんのよお」

ただ、その声は怒りを通り越していた。涙をぼろぼろとこぼしながら女が言うのと、相変わらずうろたえている男が私の方を振り返った。私は背中まであるカールした髪をかき上げて、あごに手を置いて考えているふりをした。目を合わせたまま何も言わない私たちに対して、再び怒りが戻ってきたように女は大声を出した。

「何でこんなことするのよお」

語尾が無駄に長いのは、いつもの女のしゃべり方で、今までは男の気を引くためにわざとやっているのだろうと思っていたけれど、こんな時でさえもそのしゃべり方なんだと思うと、ちよつとおかしかった。思わず吐息がふつと漏れると、女はさらに激昂した。

「あんたなんか……、あんたなんか友達

じゃないんだからあ！」

床に落ちていた、男のポロシャツを拾い上げ、大げさな動作でこちらに投げると、女はまたものすごく大きな足音を立てて出て行った。白いポロシャツは空気を含み、ベッドにまでとどかずはらりと落ちた。男は瞬間に目をふせたけれど、ドアの閉まる音がすると、顔を上げてこちらを見た。

そもそも、出会った時から友達でもなかったなと思った。今までだって、友達と呼べる人なんていなかった。

そんなことを考えていると、男が困惑した表情でじっと見つめていたので、彼を解放してあげなければと口を開いた。

「私のことはいいからさ、追いかければ」

彼の背中を押してベッドから出ると、テーブルにあった煙草を手に取り、全裸で窓辺に立って火を点けた。

いえ、だから何度も言ってますけど、私は彼女と面識はなかったんです。

あの日、合コンの人数が足りないってたまたま呼び出された飲み会に、彼女がいて、そこで初めて会ったんです。女性側の幹事ってことで、沙央理とは面識があったんだと思いますよ。どんな関係かまでは、深くは聞きませんでした。

彼女の印象ですか。どこか憂いがあるような瞳をしていましたね。長くて柔らかそうな髪をかき上げるところもすごくセクシーで、年齢はあまり変わらなかつたように記憶していますけど、何かすごく人生経験豊かな人だなと思っていました。男性の視線を一手に集めているって印象です。

彼女は、自分のことを愛のミシオネールだって言っていました。伝道師っていう言葉らしいです。どういう意味か、ですか。あの場ではすごく納得したんですけど、今改めて言語化しようとするの難しいですね。まあ、簡単に言うると、愛を分け与える人というか。愛について、もっと他

の人に伝えていきたいみたいな趣旨でしたよ。でも、男性たちはその意味がよく理解できなかったみたいで、彼女の言い間違ったこととは異なる捉え方をされていました。つまり、誰とでも寝る女だ、みたいな。

彼女の話は、わりと赤裸々な感じで、そういう性的な関係のこととかを平気で口にするから、男性は面白がっているいろいろな入っていたと思いますけど。でも、女性側としても、不思議と聞くに堪えないって感じではなかったです。彼女は、信念を持って行動しているから、それが下世話な印象を与えなかったのかなって思います。

ええ、その後、彼女は私の家に泊まりました。初めて会った人を泊めたのは、そんなに変ですか。あの日、合コンが終わった後、男性はこぞって彼女を二次会に誘いました。幹事の沙央理は彼氏から連絡が来て、会の終盤で途中退席してしまいました。はい、実は合コンとは言っても名ば

かりで、沙央理には彼氏がいたんですよ。男友達から言われて仕方なく女性を集めたようなものだったんです。

男性たちが結構しつこく誘ってきたんですけど、その時もう遅い時間だったんです。彼女は終電がなくなりそうだからと言って誘いを断り、駅に急ぎました。その時、ふいに彼女が私の腕に手を回してきたんです。私はすごく驚きました。すると、彼女は言ったんです。

「後ろから誰かつけてきている」
さりげなく後ろを確認すると、チンピラ風の若い男が物陰から見ているのが目に入り、私はさらに驚きました。

「このまま駅に行って一人になったら、あの男に捕まってしまう。お願いだから、一人にしないで」

眉間に皺を寄せて震える彼女を一人にできず、私たちは寄り添うようにそのまま歩き続けました。なるべく明るい道を選び、駅には行かず歩いていけると、彼女は終電を逃してしまいました。

気づいたら結構歩いてきており、私の

家の近くだということもあって、帰る場所のない彼女を不憫に思っただけに家に来ないか誘ったんです。その頃にはもう、不審な男はいなくなっていました。

シャワーを浴びた後、私は自分の服を彼女に貸そうとしたのですが、彼女はいらないと言って下着姿のまま床に転がりました。彼女の体は、女性の私が見てもとてもセクシーでした。まるで下着のモデルが雑誌からそのまま飛び出てきたように、大の字になっていても写真集のポーズのようでした。

「そこで寝たら風邪引くから、ベッドを使って」

すると、彼女はむくつと起き上がって、こう言ったのです。

「あなたが一緒に寝てくれるのなら、ベッドを使うけれど、あなたが代わりに床で寝るなら私はこのままでいいわ」

結局、私たちは二人でベッドに入りました。彼女の呼吸が耳元で聞こえ、少し動くと彼女の体に触れてしまう。そのたびに、私の胸はどきどきして全く眠れるよ

うな状態ではありませんでした。寝返りを打ち、彼女の方に体を向けて、そっと目を開けると、彼女もこちらを向いて目を開けていました。私は彼女に近距離で見られていたことにどきっとして、そのまま目をつぶりました。すると、彼女は優しく小さな声で囁きました。

「あなた、好きな人はいるの？」
目をつぶったまま、私は答えました。

「いるけど、叶わない」
「どうして？」

「彼には彼女がいて、その人は私の友達だから」

彼女は黙ってしまいました。私が目を開けると同時に、彼女のすべすべした手が腕に触れました。

「もしかして、沙央理の彼氏？」
凶星でした。でも、私は何も答えませんでした。

彼女は何も言わない私にそれ以上問い詰めもせず、肩に乗せた手をゆっくと背中にしていきましました。彼女の体温が伝わってきて、そのままそっと抱きしめ

られました。

「私も親友のお兄さんを好きになったことがあるわ。愛してはいけない人だった」

どうして親友の兄を愛してはいけないのでしょうか。私は疑問に思いました。でも、それがいけないことだということ、彼女の倫理観なのだろうと、そんなふうに感じました。

自然と、彼女の手が私のパジャマをまさぐり、いつの間にか私も彼女と同じように下着姿になっていました。抱き合ったらましましばらくして、私は彼女に言いました。

「仕方ないのよ。私が悪いんだから。友達の彼氏を好きになってしまった私がいけないの」

すると、彼女の吐息が私の耳元を通り過ぎました。

「私があなたを赦してあげるわ」

体を離すと、彼女は自分のレースのパンティに編み込んであった赤いリボンを腰骨の辺りから一気に引き抜きました。

私の両腕を背中へ回すと、両手首をそ

のリボンで結んだのです。

私はされるがままでした。彼女はなぜそんなことをしたのでしょうか。彼女はサディスティックな性癖があったのでしょうか。

痛くなんかありませんでした。むしろとても優しく、その後、縛られたまま彼女の胸の中で眠りました。まるで、母の胎内で守られているような、そんな温かな気持ちだったのです。

翌朝、いつの間にか開けられたカーテンから差し込む光が、白いベッドを照らしており、それで目を覚ましました。起き上がると、彼女はもうおりませんでした。私を縛っていたリボンもなく、本当に彼女がここにいたのだろうかと思議な気持ちになりました。生まれたばかりの姿でベッドの中にいる私は、彼女の言う赦しを得たのだろうかと考えました。ただ、何というか、自分でも変だと思いますけれど、すごく幸せな目覚めでした。なぜか自分に対する強い自信が生まれたような気がしたんです。

それ以来、彼女とは会っていません。

えっ、あの人が。亡くなったんですか？

3

ああ、いやよくわかんないです。あの女と会ったのは、もう半年くらい前なんですよ。会ったって言ったって、実際は見かけただけっつうか。

ちょうど帰りに居酒屋の前を通ったんですよ。したら、合コン帰りみたいな男女が次の店に行くだの終電があるだのって押し問答してたんす。自分っすか。自分は、何となくパチンコに行つて、家に帰る途中ででした。

結局、女が大学生風の若い女と二人で歩き出したんで、後をつけたんすね。いや、何かしようってわけじゃないっすよ。ただ、あの女はヤリマンだったから、あわよくば三人でできるんじゃないかってそう

思っただけです。

でも、気づいたら二人がいなくなっていて、じゃあ仕方ねえかつつうことで、ふつうに帰りました。

あの女がSかどうか？ いやいや、それはないっしょ。あいつは絶対Mですよ。だって俺がソフトなSなんで。マジ、それはないっす。縛ったり？ 俺がされたか聞いてんすか。勘弁してくださいよ。俺が縛ることはありましたよ。いや、軽くっすよ。そういうプレイっつうか。最近誰でもやるんじゃないっすかね。

あの女と初めて会ったのは、たぶんバ―だったと思うんすよね。でも、実はあんまり記憶にないんすよ。気づいたら家にいて、やった後だったっつう感じで。

それから、時々まあヤリたい時に連絡してたって感じてましたね。あいつ、全然断らないんすよ。

ああ、そういえばそんなこと言ってましたね。自分のことをミシオネールって。あと、俺を赦すとかなんとか。どんな時に言うか？ そりゃヤってる時っすね。詳

しく聞きたいんすか。それ、趣味じゃないっすよね。

何っつうか興奮してきたら、俺、首締めたり体に噛みついたりしちゃうんすよ。そうすると、あいつは苦しがりながら、「あなたを赦してあげる」とか「私にすべてをぶつけなさい」とか、何っつうか変な宗教家みたいなこと言ってましたね。

萎えるっつうのは、まあなかったすね。そんなふうに言われれば言われるほど、俺も欲望をぶつけたっつうか。あいつも楽しんでんのかって思ってたけど。

それで、急に連絡が取れなくなったんすよ。そしたら、居酒屋の前で久しぶりに会って。見失って。まあ、それで終わりっすね。

いや、ほんと自分はあの女のことは何も知らないんすよ。あいつは他に好きな男がいたんじゃないっすかね。そんな感じでしたよ。俺と会ってるのも、義務っつうか同情っつうのか、叶わない何かの代わりを見ていたように、いつもぼんやりしてたっすね。

刑事さん、まさか俺のこと疑ってるわけじゃないっすよね？ あいつ失踪したんでしょ。ニュースで見ましたよ。男殺して逃げてるって。

4

まさか、あの子は本当に純粋な子ですよ。そんなふうに見たらな関係を持つようない子じゃないです。

ただ、弟とのつながりは少し違うと感じたことはありますね。他の人とは一緒にいる時間が違いますから。幼い頃からいつも二人でいた印象でした。

私たちが育った場所は、雪深く、人も少ない田舎の町でした。音もなく降り積もっていく雪を踏みしめながら、幼い弟とあの子は家までの道のりをいつも一緒に歩いていたことを覚えています。

あの子が宗教に入信していたか？ 私たちの教義を何度も伝えましたし、コングレガンスにも連れて行きましたよ。あ

あ、ええつと信者の集まりのことです。そこで教祖様のお話も聞かせました。しかし、入信だけはどうしてもしなかったんです。ミシオネール？ いえ、聞いたことありませんね。教義にもそういう言葉はありません。新しい宗教に入ったなんて話も聞きませんでしたけどね。

こうなってしまう以上、やっぱりあの子が嫌がっても入信させるべきだったと思います。そうすれば、弟が死ぬこともなかったでしょうし、あの子がこうして失踪することもなかったと、そういうふうに思います。ええ、もちろん。あの時、入信しなかったことが原因ですよ。この事件は。だから、僕はとても責任を感じているんです。もっとコングレガンスに連れて行くべきだったと思っています。

あの子は、僕になついていました。小学生の時からずっと、弟が塾に行っている間は、僕の家で待っていましたからね。あの子が高校生の時には、僕はもう社会人で一人暮らしをしていて、部屋によく遊びに来ていたものですよ。誘惑されたか

どうか？ まさか。だから、何度も言いますけど、あの子はそんな娼婦のような女の子じゃないんですよ。本当です。

まあ、でも年頃の女子ですからね。恋の相談を受けたことはあります。好きな人が自分のことを見ていない時に、どうしたらいいと思うか、ってまあそんな内容だったと思います。相手が、自分よりも好きなことがある場合に、どうしたら振り向いてもらえるかとか。

弟のことを言ってるのかなって思いました。当時、弟はある女の子から告白されて、付き合い始めていました。だから、僕は彼女に待つしかないんじゃないかって言いました。

僕はね、弟はずっとあの子のことが好きだと思っていたんですよ。弟とあの子の関係は特別でしたから。弟は一時的な気の迷いで他の子と付き合っているだけなので、僕は待てばいいと感じたんです。

すると、あの子はこう言ったんです。「待つなんてだめ。もっと私の方を見てほしいの」

あの子が僕に近づいて、見つめ合いました。うっすら化粧をしていて、ああこんなに大人になったんだと思うと、急に鼓動が激しくなりました。それで、僕は冷静になるように、教義を唱えたんです。

「他人に何かをしてほしいと思ったら、まず自分から何かをしてあげなければならぬ」

あの子はその言葉をしばらく考えて、つぶやくように静かに言いました。

「じゃあ、私はもう何もいらぬ。私がみんなに愛をあげる」

その時、僕は教祖様の教えが伝わったと思いました。すると、彼女はもっと近づいてきて、ぎゅっと抱きしめたんです。

「私があなたを赦してあげる」

さすがに驚きましたね。女性から抱きしめられたことなんて初めてでしたから。その瞬間ですか。ええ、本当に赦しを得たような気持ちになりました。教祖様以外で、こんなふう思うことなんて今までありませんでした。いや、その後もですね。僕の人生で、あの瞬間だけです。抱きしめ

られた体から温かい熱を放っていて、彼女が天使になったように感じました。

5

「私のことはいいからさ、追いかければ」
彼女があまりにもあっさりと言ったので、まるでそうしなければならぬように僕は慌ててベッドから飛び起き、床に散らばったポロシャツとチノパンをかき集めた。

田舎から上京して借りた部屋はワンルームで、玄関から台所、そして部屋まですべてがつながっているものだった。シンブルで、一人で住むには問題なんてなかった。

彼女はよく部屋に上がりこんでは、こうして泊まっていくことがあった。恋人かと問われれば、実はそうではない。ただ、確認していないだけのよう気もする。僕たちの関係にカテゴライズが必要ではなかったただけだ。

沙央理はそうではなかった。僕に「恋人」という言葉をあてがった。だから、僕は恋人という枠の中に分類された。

服を着終えると、沙央理の出て行った玄関に向かいながら、僕はふとベッドを振り返った。

彼女は全裸のまま、机にあった煙草を手を取った。窓辺に立つと、煙草に火を点ける。朝の光を受ける彼女は、指先から空中に描かれる、白く薄いリボン体をまとって行く。口から吹き出される煙が目染みたのか、ゆっくりと目を閉じる。

その時だった。玄関の開く音がして、僕が振り返ると、そこには再び沙央理が立っていた。顔面蒼白の彼女に、僕は声をかけた。

「沙央理」

しかし、沙央理は急にとてもおびえたような声を発し、よろめきながら台所に入ってきた。そして、包丁を抜き取ると、彼女に向けた。

「あなたを殺してえ、私も死ぬう」
がたがたと震える沙央理の手と握りし

められた包丁を見て、僕はとっさに沙央理の前に体を出した。動いた僕に驚いたのか、沙央理はまた甲高い声を出して、彼女の方に走り出そうとした。

その時、どんとと沙央理の体が僕にぶつかった。

最初は何が起こったかわからなかった。目の前にある沙央理の顔がさらに白くなり、大きな目がぎよろりと大きくなった。慌てた沙央理は、僕の腹部に刺さった包丁を思い切り抜いた。

「うっ」

その瞬間に、腹部から内臓が流れ出たかと思うくらいの激痛が走り、白いポロシャツが一気に赤く染まっていった。

包丁についた血を見た沙央理は、言葉にならない悲鳴のような声を出した。

血が下腹部から股間へと流れ、チノパンがどんどん赤くなっていく。僕はたまらず膝をつき、うめき声を上げながら前屈し、床にはいつくばった。

背後にいた彼女が、沙央理に向かって言った。

「逃げて」

がたがたと震え、足をもつれさせながら、沙央理は玄関から走り出た。痛みを耐えながら、ようやく僕が彼女の方に振り返ると、彼女は腰が抜けたように、目を見開いたままベッドに座り込んだ。

僕はほふく前進の要領で、腕を使って彼女の元へ動いた。もう下腹部から足の感覚がなかった。痛み息が荒くなる。

ようやく彼女の足元まで動いてくると、彼女を見上げた。後光が射す彼女は、まるで女神のように見えた。薄くなつていく視界の中で、彼女に触れたくて、僕は最後の力を振り絞って体を起こし、彼女の腹部に両腕をまわした。

彼女は僕の頭をしっかりと抱きとめた。後頭部をなでられながら、薄れゆく意識の中で、僕は幸せものだと思った。彼女の背後から純白の翼が生え、そのまま僕を連れて行くように思えた。

白濁とした視界は、いつの間にか電車から見た雪の積もった故郷の風景に変わっていた。電車がホームに到着する。屋根

のないホームには雪が降り積もっており、電車から降りると、足跡一つない純白がキュキュツという音を立てた。

小さな雪が舞う中、ホームを歩き出すと、背後から赤い傘が差し出された。振り返ると、彼女だった。女神になる前の彼女が、青春時代を過ごした町で僕の帰りを待っていたのだった。

僕は彼女のことを好きだったけれど、彼女は僕の兄が好きだった。でも、僕の兄は家族で入信した変な宗教に入れ込んでいた。僕ももちろん幼い頃から会合に連れて行かれはしたけれど、兄ほどはその世界を信じられなかった。

僕と彼女は、お互いに叶うことのない恋をしていた。僕は彼女のことを諦めるために他の女性と恋愛をし、彼女は兄のことを諦めるために僕と一緒にいた。

純白の世界の中で、真っ赤な花の下、二人で寄り添って歩いていく。これまでもそうであったし、きっとこれからもそうなのだろう。

惨めだったのか。他人も、自分も不幸
せなやつだと思っていたのか。そうかも
知れない。しかし、子供の頃から、ポケ
ットに星屑をつめていた。いつもこころ細
い時にはポケットのなかの闇をまきぐっ
た。明るい絶望というものだってあるの
さ。真暗なポケットに宇宙があり、希
望の星はそのうちに太陽系に飛びだ
す。うつむいて歩きながら、そう考えて
いた。あの頃、辛さと屈辱を味わったは
ずなのに、いまは懐かしい。たぶん人に
とって大切なことはポケットの中の星屑
なのだ。

浅井慎平「ポケットに星屑を」

Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているんだろうか？」

そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。

“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドア
が好き。決して嫌いなわけでは
ないけど、たまにみんなとノリ
が合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫
画が好き。でも、オタクと呼ば
れる人たちとは少し違う気が
する。

ひとりでは考え込み、ノートに
書きつけ、誰かと出会いたいと
試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自
己表現する場をつくりまします。

星屑書房
STARDUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp <http://stardustbooks/soragoto.net/>

編集後記



天沼 太郎

恥ずかしながら、今回月一で作ってる俳句を載せました。恐ろしいもので、一年以上前のものはほとんど覚えていなかったりします。感心するなり、この程度でいいのかと呆れるなり、楽しんでください。



馬場 貴生

昔は漫画家を目指していました。今、また漫画を描けることは、僕の人生にとってはよいことです。



松田 定幸

「きりん座」は、本来アフリカ大陸の实在動物であるジュラフに由来しているのですが、「麒麟」という字面の良さを重視して、架空動物の方を描いてみました。



ぼえまる

「さくらだぼうるあず」が閉店しました。「点と文」散文と詩、文学の可能性をめざしてを創刊し、地元の新聞に大きく取り上げられました。県立図書館や埼玉県の視覚障がい者の団体からも注文が入り嬉しいです。創刊号は特別価格で販売中。



間々えいよ

かほちゃんは英語でSquash。正しい英語を覚えましょう。



一路 真実

誕生日にペンタブをもらいました。厚絵が描けるように練習しています。



衣 空

ずっと裏方で働いていました衣空です。十二月にスウェーデンへ旅をします。世界で一番か二番に好きなバンドが解散してしまうので最後のライブを観に行きます。観光する暇はありません。私の旅なんていつもそんな物です。高知以外は。



あ き

初参加になります、あき、です。道端でかわいい顔を見かけたのでアイコンにしてみました。



詠人不知

ま、まさか…



甲斐 聖子

あれとそれとこれと向こうの狭間、文字に無い言葉、空間を感じ取っていただけたらと思います。

星屑書房は、好き勝手に表現活動を行っていく文化系サークルです。フリーペーパーの制作、配布が中心ですが、他の文化系活動も取り入れたいと思っています。少しでも興味を持たれた方は、こちらにご連絡ください。お待ちしております！

創星 第14号

2016年10月23日 初版

発行元 星屑書房

<http://stardustbooks.jimdo.com/>

©2016 STARDUST BOOKS, Printed in Japan.

本書を無許可で複写・複製することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

